



## (論文梗概)

*A Revision of Keats's Myth of the Fall*

An Interpretation of the Major Works of Keats in Terms of Myth-Making

Kiyoshi Nishiyama

本論文は 19 世紀イギリス・ロマン派の詩人 John Keats(1795-1821)の作品世界を、神話創造の観点から分析した *Keats's Myth of the Fall* (北星堂書店刊・1993 年) に、その後の研究成果を踏まえて修正、加筆をほどこしたものである。欧米の研究においては、ロマン派の詩人に対する神話分析は N. Frye や D. Bush あるいは P. Cantor などの学者をはじめとして、かなり以前からおこなわれてきた。この神話分析では、グレコ・ローマンのいわゆる古典神話の題材をどのように詩人たちが翻案したのかにおおむね焦点が定められてきたが、これはロマン派の作品に顕在する神々や英雄群のほとんどが古典神話からの借用であったという理由による。しかし、この分析にしたがえば、イギリスをふくめたキリスト教圏の文化背景にあるもうひとつの神話である、ヘブライ・クリスチャン神話(聖書)の与えた大きな影響が見落とされがちとなる。たしかにロマン派の作品においてはヘブライ・クリスチャン神話の直截的な翻案は少ないのであるが、それだけの理由で詩人たちの意識に潜在する神話の力を無視することはできない。

人間の原罪にはじまる楽園喪失の過去から、現在の荒野を経て未来の楽園回復にいたるという可能性の図式は、原罪という観念自体が希薄な古典神話に求めることはできない。しかし、深く自己に沈潜し存在の意義を問い、超越的あるいは絶対的権力に対して個の優位を唱えたロマン派にしてみれば、否定的であれ肯定的であれヘブライ・クリスチャン神話のパターンを作品の通奏低音とすることは、いわば理の当然であった。古典神話を作品に多用した事実も、かれらが潜在的にもつ原罪意識の裏返しとみなすことができる。

「神話」という日本語にはどうしても否定的な響きがつきまとうが、神話は決して無定見につくられたものではない。人の生に内包される何らかの欠落感や飢餓感を解消したり、人が存在する世界にリアリティーを持たせる必要が生じたときに、神話は生み出される。何であれ全く説明のつかない状況に直面した場合、人は存在の不安に駆られるものであるが、もしその状況の背後にある種の法則や秩序を想定することができれば、霧中の不安感は解消される。同様に、眼前の森羅万象の不可思議や来歴に思いを巡らせ、それぞれ個別と思われた事象を互に関連づけて、世界の仕組みを有機的に説明したものが神話なのである。神話により、人は自身と世界とのつながりの意味を読み取り、ひとつの価値体系における自己存在の意味と方向性を確認してきたのである。

人間があるものの実体を把握しようとするときには、何らかの意味での虚構が必要である。このとき、真理に到達するための手段として、存在するものにかぶせられるヴェールが神話であると考えればよい。しかしながら、神話を支える既存の枠組が大きな社会変動などにより崩壊し、神話が本来の機能を果たせなくなるときがある。そのような場合には、その社会の裡に生きる個人の想像力が、旧来の神話を読み替えてあらたな神話創造へとむ

かう。とうぜんそこには個の多様性に応じた、多様な神話の形態が誕生することになる。ロマン派の神話創造に対する本論文の立論はここを基点とする。これまで日本においては神話分析を核としてロマン派の作品世界を解明した研究は皆無に等しく、しごく表面的に触れられることがあったとしても、それは欧米の研究をそのまま踏襲してグレコ・ローマン神話を扱ったものでしかなかった。本論では、ロマン派詩人キーツの個としての想像力が、いかに新しい神話世界を構築して普遍性に到達していったのか、そして固有の神話世界を構築する際に、ヘブライ・クリスチャン神話がどのように機能していたのかを詳述する。上に述べたように、神話創造は社会変動と切り離して考えることはできないため、論述にあたっては観念的に流れることをつとめて避けた。具体的には、当時の定期刊行物の記事に拠って、詩人の生きた時代の潮流と詩人との関わりを明示的に論証することから始め、その後に時代背景との有機的関連を保ちつつ、詩人の神話世界の考察をおこなった。

本論文の構成は以下の通りである。

全体は四章からなり、第一章は *The Religious Milieu of the Romantics*、第二章は *The Genesis of the Poetical World: Endymion*、第三章は *The Fortunate and the Unfortunate Fall: 'The Eve of St. Agnes' and 'Lamia'*、第四章は *In Quest of a Promised Land: The Odes and the Two Fragments of 'Hyperion'* である。以下、順を追って概要を述べる。

第一章：ここではロマン派の神話創造にかかわる時代的特性と、神話創造の理論と実践例が検証される。前半では当時の社会を取り巻いていた宗教界の状況が『ジェントルマンズ・マガジン』や『エディンバラ・レビュー』などの定期刊行物の記事をもとに再構成され、後半では詩人たちによる神話創造の具体例が考察される。この章の特色は、時代考証が単なる歴史書に頼っておこなわれるのではなく、定期刊行物という一次資料に直接あたってなされていることである。定期刊行物の記事を活用する文学研究の方法は、いわゆる「文学論研究」に偏りがちな日本の英文学界ではあまり例がなかった。しかしながら、未曾有の社会変動の渦中にあったロマン派の歴史的特性がかれらを神話創造に駆り立てたのであれば、詩人たちの生きた社会の「内側」に神話創造の契機となる歴史的事実を求めなければならない。この目的をはたすためには、時代の生ける姿を映し出す定期刊行物が必要不可欠なのである。

この史料に基づき、まず十九世紀初頭の政治・経済の状況と市民生活の実体が、具体的な数値を援用しつつ描き出され、ついで、当時、墮落の極みにあったイギリス国教会の内部事情とそれを取り巻く宗教界の状況があきらかにされる。ヨーロッパを驚天動地させたフランス革命と産業革命の大波にもまれたイギリスでは、旧来の社会、政治機構を改革する機運が高まり、普通選挙の実施、奴隷制の廃止、カトリック解放、議会の年次開催要求など、さまざまな改革を求める声が各地で高まった。

しかし、1783 年いらい保守党に政権を委ね、賄賂にまみれた腐敗選挙区を利権の温床としていた議会は、機構改革に積極的であったとはいいがたく、また、議会と連動する国教会も説教の質の低下を憂う庶民の声には耳を貸さず、聖職者の兼職や聖職禄の改正は

おろか、人口増にあえぐ教会区の再編などにも手をつけずにいた。とりわけ、世俗版の「最後の審判」と目されたフランス革命の理念が霧散すると、旧来のキリスト教神話に依存していた歴史観は根底からゆさぶりをかけられることになった。歴史の起承転結がもはや判然としなくなったのである。このようなときに人びとの精神生活の指針となるべきはずの国教会の無力ぶりは、旧来の信仰そのものに対する民衆の不信感を増幅させるばかりであった。国教会の威信が著しく低下すると、信仰の不在の間隙を衝くかのように復興してきた福音主義が社会の各層に影響力を及ぼしはじめ、非国教会の各宗派も着実に信者を増やしていった。さらに、長らく社会的な権利を抑圧されていたカトリック教徒の解放問題も、アイルランド統合を機にいつきに宗教と政治の表舞台に登場してきた。

このような信仰母体の混乱の中で、詩人たちは旧来のキリスト教神話の根幹を構成していた「楽園—楽園喪失—楽園回復」という弁証法が、もはや機能しなくなってきたことを悟った。これまでは外界に求められた宗教的実体の相関物、あるいは実体そのものを、かれらは自身の内面に求める方向を辿りはじめた。すなわち、人間性中心の観点から、キリスト教神話の弁証法を「無垢—経験—高次の無垢」と読み替えていくのである。

国家と国教会という、キリスト教神話の屋台骨を支える社会機構と宗教界の混乱を神話創造との関連性において考究することは、我が国の学界ではいまだ手付かずのままであったが、以下ではロマン派の「正典」(Canon) を構成するブレイク、ワーズワス、コールリッジ、バイロン、シェリー、キーツの実際の作品に即して、詩人たちの神話体系構築への歩みが具体的に検証される。これらの詩人の一時期あるいは一生涯を通じての詩作の基底には、共通する特質がある。原罪から千年至福までいたるキリスト教神話の閉塞的で直線的な歴史観は、自己を存在の統治者と自任する詩人にとっては不条理そのものでしかなかった。かれらは、歴史を自己実現にむけてたえまなく生成と発動をくりかえすプロセスと捉え、開放的な新しい歴史観の可能性を模索するのである。

**第二章：**この章では「想像力が捉えた美の真実」を追究するキーツの野心的な物語詩、『エンディミオン』の神話構造の特質が考察される。第一段階は、神話体系構築の核となる愛の観念が詩人の思索の深まりとともにこの作品でどのように変容していくのかを探り、ついで、この作品がキーツの価値体系の核となり、いかにのちの作品世界に有機的に発展することになるのかを検証する。

まずはじめに、長い批評の歴史をもつキーツと『エンディミオン』に関する先行学説の紹介と学説の位置づけがおこなわれ、ついで詩人自身の書簡や周辺の人びとの証言、定期刊行物の記事等を交えながら、作品の内部世界が精査される。

この作品の主要なテーマは愛であるが、それは自と他の和解を果たすことにより有機的統一を求めるロマン派の意識が生み出した新しい観念である。ラトモスという孤島の楽園で生を送っていた支配者エンディミオンは、木蔭で美しい月姫シンシアの夢を見ていらい、楽園の外に意識をむけるようになる。自と他の分裂を意識する体験そのものが失楽であり、このためエンディミオンの無垢なる生の統一感はずたわれ、彼は月姫探求の旅に出る。よく知られる「幸福論」の愛の定義(一卷)にしたがい、旅は「月」の支配下にある地中(二巻)、海底(三巻)、天空(四巻)の全ての領域におよぶ。旅路の果てにラトモスに

戻ると、エンディミオンはインド娘に変身した月姫と結ばれることになり、楽園の回復を果たす。

エンディミオンの旅路はいくつかの愛のエピソードにより構成されるが、論者は『エンディミオン』を理想美との合一を描いたアレゴリーとする説を排し、「ヴィーナスとアドニス」「ジャスミンの木蔭」「アルフェウス・アレシューザ」（二巻）、「グローカス」（三巻）、「インド娘」（四巻）の各エピソードを、いずれもエンディミオンと月姫シンシアの愛の変奏とみなす。すなわち、作品の創作過程において急速に生の哲学を深めていったキーツは、やがて作品の執筆開始のころに抱いていた愛の観念を変容させざるをえなくなり、作品における愛のエピソードはさまざまに変奏されることになったのである。とりわけ「グローカス」のエピソードはキリスト教神話の核を構成する要素に満ちており、詩人の愛の観念が想像力により人道主義の方向に変容を遂げたことを物語る。

成熟にむかうキーツの生の哲学は、美しい夢に沈潜する退行的な自己愛のみを作品に投影することをもはや許さず、真に他者に対して開かれた発展的な愛のありようをエンディミオンに求めさせたのである。物語の結末はいささか強引で、御伽噺めいたものにならざるをえなかったものの、詩人の作品に頻出する「木蔭」（bower）のイメージが、無垢であり無知なる生を内包する「楽園」の象徴として定着するのはこの作品においてであった。失楽の現実を拒み、ひたすら自己の裡に退行して楽園を追い求める不毛の生を、いかに想像力により豊饒の生へと変容させるのが、こののちの詩作の主題となる。

第三章：この章では、対照的な結末をむかえる愛のありようが、二つの物語詩を通して描かれる。

「聖アグネスの夕べ」は中世趣味に彩られた物語であり、形態的には『エンディミオン』と同じく「探求ロマンス」のジャンルに属する。ここでは荒野の孤城が物語の舞台となるが、ラトモスといい孤城といい、他から隔絶され閉ざされた場所は、神話的には「楽園」の変奏とみなされる。無垢であり無知である楽園の生を脱し、人間として成熟した意識を獲得するのか、あるいは、現実界にありながら、意識を退行させて楽園の夢を見続けようとするのか。人の生とは物語の構成要素である「睡眠と覚醒」に象徴されるように、退行と発展という意識の絶え間ない確執にほかなるまいが、この物語の主人公である二人の恋人は前者を選択する。それは詩人自身の裡にある、「創造的本能と倫理的意思」との確執でもある。

1月21日の前夜、城主の娘マデラインは、乙女の夢の中に未来の夫が啓示されるといふ聖アグネスの伝説に囚われ、城で開かれている現実の饗宴を拒否して、ひたすら自己の夢に退行しようとする。いっぽう、恋人ポーフィローも、みずからの思い描く理想のマデラインの姿のみを求め、寝室に忍び入り彼女の裸身を盗み見る。二人の愛は、ともに自己意識の投影としてのみの存在を他者に求める自己愛でしかなく、他者との和解を可能にする開かれた愛ではない。この意味で二人は無垢であり無知なる楽園の夢を見続けているにすぎない。

しかし、詩人は『エンディミオン』で描いた理想と現実の安易な融和という轍を踏むことはなかった。マデラインの夢に滑り込み彼女と結ばれたポーフィローは、マデライン

を覚醒させ、二人の行為が現実のものであったことを彼女に告げる。現実を忌避して楽園に退行することの不毛を悟った二人は、孤城を抜け出し、寒風吹きすさぶ現実の嵐の荒野に突き進んでいく。

いっぽう、オヴィディウスの『変身譚』やバートンの『憂鬱の解剖』などに取材した「レイミア」では、美女に変身したヘビ女レイミアと彼女の虜にされたリシウスは「聖アグネスの夕べ」とは正反対の方向を辿る。

哲学的瞑想の世界に耽る若きリシウスは、この世のものとも思われぬ美女に瞑想を破られ、愛欲の世界に身を投じる。リシウスにとっての「見かけ上の」楽園喪失である。レイミアは魔法によって自身の夢の世界にリシウスを留めおこうとするが、楽園へ退行しようとする意識の変奏としての「この世の虚飾」に駆られたリシウスは、レイミアの懇願を振り切って彼女を華燭の宴に連れ出す。リシウスは相互補完するはずの夢想と覚醒の意味が分からず、安易に理想と現実とを融和させようとする。失楽を拒みながら現実を希求するのである。むろん、現実界での実体を持たないレイミアにとり、現実の荒野に足を踏み出すことは回復不能の楽園喪失となる。それゆえ、リシウスの師である賢哲アポロニウスの冷徹な視線によって正体を見抜かれると、レイミアは消え去り、現実の重みに耐え切れぬリシウスも息絶えて死ぬ。

この作品は、詩人の実生活で体験した恋や出版界との確執のアレゴリーとして読まれることもあるが、時代的な背景と伝記的事実との関連に鑑みて、論理的、現実的な「哲学」と想像的、夢想的な「詩作」との狭間にゆれる詩人の苦悩を表出したものと論者は解釈する。この苦悩と向き合い、苦悩の裡に生の意味を探ることは、詩人の存在原理にかかわる命題である。この命題の延長上には、二つの断章の叙事詩「ハイピーリアン」があり、詩人は歴史の転換期にある現時、現処の存在の意味づけと、自己と外界との和解の可能性を神話創造を通して探ることになる。

**第四章：**ミルトンの『失楽園』をモデルにした「ハイピーリアン」では、タイタン神族とオリンピア神族の確執を通して新旧の世代交代が描かれる。この神話は、歴史的転換期に生きる詩人が到達した歴史観の表明でもある。

オリンピア神族との戦いに敗れ、没落の悲哀に沈むタイタン神族の族長サターンは、失われた過去の栄光に自身のアイデンティティを求めるべく、ひたすら現実を忌避する。歴史の流れを押しとどめることは不可能事であり、流れに抗うことが自己を現時、現処から疎外することにサターンは気づいていない。没落した現在の裡に自身の生の積極的価値を求める苦悩を受容せず、理想化された無垢なる過去に退行する意識に対しては、未来のヴィジョンは経験界の闇に沈む。現在の没落は、存在のより大いなる調和をもたらす歴史のプロセスの一部であることに、サターンは気づいていない。変遷を超越して無垢なる楽園にとどまり続ける特権を失わせたのは、タイタン神族に内在する瑕疵ではなく、歴史のプロセスそのものなのだ。

かれらの眷族である海神オーシアヌスのみが、「美において優るものが力において優る」という「自然の大法」によって没落という状況が生じたことを看取している。かれらの存在自体が自然界の調和を構成する要素であれば、淪落した現在になしうる最善は、この大

法をより美しい世界を招来する原理として受容し、それに従うことなのである。

タイタン神族の没落とオリンピア神族の台頭は、歴史の進展に不可避の事象である。タイタン神族の苦悶は、オリンピア神族の生誕にむけての胎動にほかならない。この胎動を経て誕生したオリンピア神族は、タイタン神族より無垢ではないが、美において優る。この認識は単に歴史における過去と現在のありようを表明するものではなく、無垢と経験という個の存在における連続した発展段階のアレゴリーとなる。外界における世代交代が個の認識の発展と結び合わされているのである。オリンピア神族の寵児アポロは、タイタン神族の最後の栄光をになう太陽神ハイペーリアンから神権を移譲されると、記憶の女神モニエーの啓示により、神々の没落と生誕の歴史が自身の認識の発展の外在化にほかならないことを知る。彼は女神の表情から個としての自身の歴史を読み取るとともに、記憶を通して自己の過去と現在との溝を埋める。それは同時に自身の記憶と人間一般の記憶との同一化にほかならない。歴史においてハイペーリアンの相は絶え間なく死滅し、アポロの相は絶え間なく生成するのである。ここに没落の悲哀と生誕の歓喜が、個の認識の裡に有機的に統合される。

つぎの「ハイペーリアンの没落」では、前作でアポロの神権獲得までに集約された外界の歴史が主観化あるいは内在化され、話者であり行為者である詩人の認識の変遷として夢想のかたちで描かれる。個としてのイエスの生涯における言葉と行為が、旧約のユダヤ民族の歴史を成就したものとして描かれる、聖書神話の予型論の図式をここに読み取ることができる。

個としての発展の夢想を外界の歴史のプロセスと有機的に結ぶために、詩人は客体化した個我をまず楽園に解き放ち、そののち楽園喪失後の生の軌跡を辿らせる。それは個別でありながらなお普遍の歴史の再構成となる。

それでは、詩人は楽園喪失後の疎外感を解消して、裡なる存在の定点を確保したのだろうか。詩の祭壇の巫女である記憶の女神モニエーとの対話により、自己批判を繰り返しつつ詩的認識の最終段階に導かれる。ここで詩人はみずからの「魂」のありようを確認するべく、存在の神秘をはらむ巫女のヴェールを上げる。しかし、このパンドラの箱にあったのは希望などではなく、いつ果てることもなく循環する存在のかなしみでしかなかった。

淪落の苦悩から生じた歓喜はふたたび新たな苦悩を生む。この循環には到達しうるゴールはない。それは断片として存在する人間の生の認識を超え、かぎりなく進展する歴史のプロセスそのものの提示でしかなかった。巫女の表情は、どのようなものであれ存在の統一を可能とするようなヴィジョンを拒否する。それは再生のための死を死にながらも、なおよみがえった生を生きえぬ悲劇であった。

詩人は「ハイペーリアンの没落」で自己創造のプロセスを描出するはずであったが、作品は逆に自己破壊のプロセスを辿り、断章として残された。この混沌の先に、はたして調和の地平は見えてくるのだろうか。最後のオード「秋に寄せる」で描かれた静謐な美の世界のありようにその可能性の一端が示されるが、可能性を十全に開花させる前に、結核が詩人の25歳の生を閉ざしてしまった。

詩人の役割は淪落した生を超越することではなく、断片としての生の意味を噛みしめて、

詩という「夢」で生の不全をあがない続けることだ。詩人が詩人としての夢を見続け、断章としての生に留まる限り、悲劇的であろうとも生の神話自体は閉ざされることなく、彼方に「約束の地」を提示し続けることであろう。

以上

\*\*\*\*\*

(追記)

本論文の母体となった *Keats's Myth of the Fall* はすでに国内では『英語青年』（研究社）『英語年鑑』（研究社）『イギリス・ロマン派研究』（日本イギリス・ロマン派学会）『英文学』（日本英文学会）の各誌上で、また海外では *Keats-Shelley Journal* (The Keats-Shelley Association of America) で、それぞれ書評に取り上げられている。また、同書でとられた神話分析の手法は、その後の研究においてさらに深められ、『聖書神話の解説』（中央公論社・1998年）に結実した。参考のため、ここに副資料として同書を添付する。